The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『生命の水』序論に見られるアーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論
Author(s)	松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学論集. 2006, 33, p. 13-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79976
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第33号（2005年）

『生命の水』序論に見られるアーザードの ウルドゥー語・ウルドゥー詩改革論

松　村　耕　光

The Reform of Urdū and Its Poetry: A Study on the Introductory Part of *Āb-e Ḥayāt* (The Water of Eternal Life)

MATSUMURA Takamitsu

Muḥammad Ḥusain Āzād's *magnum opus*, *Āb-e Ḥayāt* (The Water of Eternal Life) is generally considered a work on the history of classical Urdū poetry, full of nostalgic tints. But in this work, especially in the introductory part, Āzād deplores the miserable condition of Urdū and its poetry and proposes some measures to reform them and to enable them survive the new age. This paper, after summarizing Āzād's view on the formation and development of Urdū, tries to cast light on this reformist side of the introductory part of *Āb-e Ḥayāt*.

Contents:

Introductory remarks
I) Āzād's view on the formation and development of Urdū
II) Āzād's criticism on Urdū and its poetry
  1) The influence of Persian figurative expressions
  2) The deficiency caused by 'delicate thought (*nāzuk khayālī*)'
  3) Repetition of specific themes
III) Reform of Urdū and its poetry – English mode of expression

はじめに

ウルドゥー近代詩運動の指導者であったムハンマド・フサイン・アーザード（Muḥammad Ḥusain Āzād 1830－1910）は、詩人であると同時にウルドゥー文学の研究者でもあった。1880年に出版されたアーザードの著書『生命の水（Āb-e Ḥayāt）』は、ウルドゥー語で著された本格的なウルドゥー詩史の研究書として有名であり、現在に至るまでウルドゥー文学史の研究に大きな影響を及ぼしている。[1]

『生命の水』の全体的な構成は次のようになっている。（括弧の中に記されたページは、1982年にラックナウーのUttar Pradesh Urdu Academyより出版された『生命の水』のページを表しており、全部で528ページある。本稿において『生命の水』の引用文のあとに示されたページは、この版のページである。）

序文（p. 1）
（1）ウルドゥー語の歴史（p. 6）
（2）ブラジ・バーシャーにペルシア語が流入し、いかなる影響を与えたか、また、将来にどういう希望があるか[2]（p. 25）
（3）ウルドゥー詩の歴史（p. 64）
（4）生命の水（p. 81）
結語（p. 526）

（4）の「生命の水」が本論に当り、この部分でアーザードは、ウルドゥー詩の歴史を5段階に分け、18世紀のデリー詩壇に大きな影響を与えた詩人ワリー（Walī 1707年頃没）から19世紀の詩人ゾウク（Ẕauq 1790－1854）、アニース（Anīs 1802－1874）まで代表的なウルドゥー詩人約20名の生涯と作品について紹介と論評とを行っている。

ウルドゥー語の形成、発展の歴史をサンスクリットの形成から説き起こして概説した（1）の「ウルドゥー語の歴史」、インドの言語の一つであるブラジ・バーシャーがペルシア語の多大な影響を受けて変化した結果誕生したのがウルドゥー語であると考えるアーザードが、ペルシア語の影響について詳細に論じた（2）の「ブラジ・バーシャーにペルシア語が流入し、いかなる影響を与えたか、また、将来にどういう希望があるか」、そしてウルドゥー詩の歴史を概観するとともに、詩の本質、権力と文学、詩の進むべき方向等が論じられた（3）の「ウルドゥー詩の歴史」は、（4）の本論「生命の水」に先立つ序論を構成している。この序論部分でアーザードは、ウルドゥー語やウルドゥー詩の歴史を概観しているばかりでなく、ウルドゥー語・ウルドゥー詩の状況を慨嘆し、改革の方法を提示してもいる。本稿ではこの序論部分に見られるウルドゥー語・ウルドゥー詩に関する見解を整理するとともに、アーザードのウルドゥー語・ウルドゥー詩改革案を検討してみたいと思う。[3]

Ｉ）ウルドゥー語の形成と発展に関するアーザードの見解

アーザードは序論（１）「ウルドゥー語の歴史」を次のような言葉で始めている。

「我々のウルドゥー語がブラジ・バーシャーから生まれたということ、そしてブラジ・バーシャーが純粋にインドの言語であるということ―この程度のことは誰でも知っている。しかし、それはインドとともにこの世に現われたのではない。それは800年以上遡れる言語ではない。その故郷はブラジの草原である。」(p. 6)

アーザードによれば、ブラジ・バーシャーがウルドゥー語に変化したのは、ムガル皇帝シャージャハーン(在位1628－1658)の時代の、シャージャハーンが建設した都シャージャハーナーバード（デリー）においてである。

「当時、ムスリムの言語はどのような状況にあったのであろうか。イスラームが到来して数百年の歳月が流れていた。彼らの先祖は何世代にもわたってここで生まれ、ここで死んでいった。相互交流のために彼らはここの言葉、すなわち、ブラジ・バーシャーを話さなければならなかったであろう。[4] 新しく来た者は、自分の言葉とここの言葉とを半分ずつ混ぜ合わせて話していたことであろう。こういった言葉で書かれた散文の著作は見当たらないが、アミール・ホスロー（Amīr Khusrau 1253－1325）の先述のガザル（ghazal 定型抒情詩）やなぞなぞ、ムカルニー(mukarnī　恋人について述べているかのように思わせて、最後に恋人のことではないと否定する内容の四行詩）とギート（gīt 歌）は、ヒジュラ暦700年（＝西暦1300/1301年）には、インドのムスリムがバーシャーを十分に使いこなしていたことを示している。さらに、これらの作品によって、ムスリムもこの国の言葉を自分の言葉だと考えはじめていたことが分かり、どれほど愛着をもって話していたかが分かる。恐らくヒンドゥーに比べてペルシア語やアラビア語の単語がムスリムの言葉には多く現われたことであろう。ここに住み、生活が安定すればするほど日に日にペルシア語、トルコ語の力が弱まり、この国の言葉の力が強まったことであろう。ティムールの子孫（＝ムガル朝）の幸運の太陽が頂点にあったシャージャハーンの時代に、都城が次第に建設されるようになり、デリーが首都となった。皇帝と官僚たちは、大抵の場合、デリーで暮らすようになった。軍人、文人、職人、商人など各国、各都市の人々が集まって来た。『ウルドゥー』とはトルコ語で軍の市場のことを言う。王の『ウルドゥー』や宮廷では、ほとんどの場合、さまざまな単語を混ぜ合わせて話をしていた。その言葉はウルドゥーと名づけられた。」(p. 19　引用文中の丸括弧内は引用者による註である。以下同じ。)

ブラジ・バーシャーからウルドゥー語がどのように誕生したのか、アーザードは詳細には論じていないが、インドの言語であるブラジ・バーシャーに、ムスリムの使用していたアラビア語、ペルシア語、トルコ語そしてさまざまな国や都市の言語の影響が及んでシャージャハーナーバード(デリー)で誕生したというのがウルドゥー語誕生に関するアー

ザードの基本的な考えであった。[5]

このようにして誕生したウルドゥー語は、着実に発展を遂げ、アーザードによれば、ムハンマド・シャー（在位 1719－1748）の時代にはペルシア詩を真似てウルドゥー語でも詩が作られるようになった。

「大地が植物なしではいられないように、明らかに言語も詩なしではいられない。ムハンマド・シャーの時代、悦楽の絶頂期に上流階級の人たちはこう考えたことであろう―父祖はペルシア文芸の中に花園を作り出していたが、今や自分たちの言葉があるのだから、我々はこれで自分たちの腕前を示そう、と。彼らはペルシアの形式をウルドゥー語に移し、ガザルやカスィーダ（qasīdah 頌詩）を作り始めた。[6]」（p. 27）

過去において文人たちはウルドゥー語による詩作には関心を向けたが、ウルドゥー語の散文に目を向けた者は誰もいなかった。何故ならペルシア語で用が足されていたからである。しかし、誰もが知っているウルドゥー語で散文作品を著し、人々の称賛を得ようとして、ミール・ムハンマド・アター・フサイン・ハーン・タハスィーン（Mīr Muḥammad ʻAṭā Ḥusain Khāṅ Taḥsīn）が 1798 年に『ノウ・タルゼ・ムラッサ（Nau ṭarz-e muraṣṣaʻ）』という物語を執筆して以来、ウルドゥー散文は着実に発展してきた、とアーザードは述べ、次のように近代におけるウルドゥー散文の発展を跡付けている。

「興味深いことに、ウルドゥー語の分かり易さ（ʻām fahmī）を見て、宗教もその祝福の手をウルドゥー語の頭の上に置いた。すなわち、1807 年にマウラヴィー・シャー・アブドゥル・カーディル（Maulavī Shāh ʻAbd al-Qādir）がコーランをウルドゥー語に翻訳し、その後、マウラヴィー・イスマーイール（Maulavī Ismāʻīl）が数冊の小冊子を一般のイスラーム信徒を教育するためにウルドゥー語で著した。」（p. 24）1835 年にはウルドゥー語はいくつかの官庁で用いられるようになり、1836 年にはデリーでウルドゥー語の新聞が発刊された。「これがこの言語の最初の新聞である。これは今は亡き我が父のペンから生み出された新聞であった。[7]」（p. 24）「分かり易さ（āsānī）のゆえに、そしてこれこそがこの国の言語（mulkī zabān）であるがゆえに、この言語（＝ウルドゥー語）は官庁の言語となった。[8] ウルドゥー語は次第にペルシア語を背後に押しやり、前進を始めた。政府は、この国の人々にこの国の言葉でイギリスの学芸を教授するのが適当であると考え、1842 年にデリーに協会を設立した。翻訳が行われるようになり、学術用語が提供されるようになった。」（p. 25）

このようにウルドゥー語の発展ぶりを描くアーザードが、「数年来、この国の言語（＝ウルドゥー語）は着実に発展しているようである。学問の言語としても用いられるまでになっており、この言語は近い将来、学問の世界で特別な地位の椅子に座ることであろう」（p. 1）と、ウルドゥー語の発展に大きな期待を寄せるのは当然であると言えよう。しかしアーザードは、ウルドゥー語の状況に決して満足してはいなかった。

II）ウルドゥー語・ウルドゥー詩批判

アーザードは、『生命の水』の序論の中でウルドゥー語やウルドゥー文学、特にウルドゥー詩の欠点を具体的に指摘し、その改善について論じている。その内容をまとめると次のようになるであろう。

1）ペルシア語の比喩表現の影響

アーザードによれば、ペルシア語（そしてペルシア語の大きな影響を受けているウルドゥー語[9]）とブラジ・バーシャー（ヒンディー語）の文芸の間には次のような違いがある。

「ペルシア語とウルドゥー語の文芸には難解さ（dushwārī）があり、ヒンディー語の文芸には平易さ（āsānī）がある。このことについて注目すべき重要な点は、バーシャーが表現対象の状態を、見たり、聞いたり、嗅いだり、味わったり、触れたりして得られる特徴で我々に理解させようとする点である。その表現には誇張の力や熱情のほとばしりはないが、聞いている者は、その表現対象を見て得られる感動を聞くことによって味わうことができるのである。反対にペルシアの詩人たちは、表現対象の好悪をはっきりと示すのではなく、表現対象に似た、我々が好悪の感情を抱いている物体の属性を表現対象に結びつけ、その属性について述べるのである。たとえば、花は繊細さ、色彩、芳香ゆえに恋人に似たものであるので、厳しい暑さの中にいる恋人の美しさを表現しようとするとき、彼らはこう言うであろう—暑さのために花の頬から露の汗が滴り出した、と。」(p. 50)

ペルシア語のこのような比喩表現は、二つの大きな問題をウルドゥー語にもたらしたとアーザードは言う。第1の問題は、ウルドゥー語形成期に比喩が大変好まれたため、比喩表現が過度に行われるようになってしまったということである。

「このためにウルドゥー語はまるで隠喩、直喩という色に染められてしまったかのようであった。それも急速に。顔に塗られたウブタン（ubṭan　美肌効果があるとされる黄色い化粧ペースト）の色程度、目に入れられたスルマー（surmah　目によいとされるアンチモンの黒い粉）の色程度であれば美しさや視力に有益であったことであろうが、残念ながらその強烈さは我々の表現力の目を大きく傷つけ、言葉を空虚な妄言の見世物にしてしまった。その結果、バーシャーとウルドゥー語の間には天と地ほどの開きができてしまった。」(p. 49)

第2の問題は、ペルシア語の影響でインド的な比喩表現がペルシア的あるいはアラビア的な比喩表現に取って代わられてしまったということである。

「バーシャーの性格を見るがいい。あらゆる言語と交際しようという、何と社交的な性

格を持っていることか。その詩や散文をじっくりと見てみよ。バーシャーはその語彙の中に客人のための場所を設けただけでなく、アラビア語やペルシア語の風土的な特色を伴った多くの単語や思想をも受け入れた。インドでは（『マハーバーラタ』の英雄）ビーマ（Bhīma）やアルジュナ（Arjuna）に与えられていた勇者活躍の場が、（ペルシア叙事詩『王書』の英雄）ルスタム（Rustam）とサーム（Sām）に与えられたのである。」（p. 38）

「美の寝室には（アラブの美女）ライラー（Lailā）と（ペルシア詩のヒロイン）シーリーン（Shīrīn）が現れた。彼女たちが現れたならば、（パンジャーブの恋物語の主人公）ランジャー（Rāṅjhā）に代わって（ライラーを恋する男）マジュヌーン（Majnūn）や（シーリーンを恋する男）ファルハード（Farhād）がどうして現れないことがあろうか。マジュヌーンやファルハードの目からガンジス河やジャムナー河は流れ出ない。それでアムー・ダリア河やシル・ダリア河がインドに出現せざるを得なかった。ヒマラヤやヴィンドヤー山脈ではなく、彼らはベーストゥーン山やシーリーンの城、アルワンドの山に頭を打ちつけるのである。しかし、才気ある人なら、土地の花で家を飾ろうと思えば飾ることができるのであり、土地の花は素晴らしい趣を与えてくれるのである。[10]」（pp. 38－39）

2）「繊細な思考法」のもたらした欠陥

ペルシア語・ペルシア文芸がバーシャーにもたらした好影響についてアーザードはこう述べている。

「ヒンディー語の（「～の」を意味する後置詞）kā、kē、kīによる連結で冗長になっていた部分が、ペルシア語の連語法によって簡潔になった。また、恐らくバーシャーは書物や文芸の言葉ではなかったという理由で、あるいは、kā、kēが連続するとぎごちない言葉になってしまうのと同様、比喩に多くの単語を用いると詩が表現力を失ってしまうという理由で、バーシャーでは隠喩や直喩はあまり用いられていなかったが、我々の父祖は、ペルシア語をバーシャーに導入し、バーシャーを隠喩と直喩とで飾り立てた。その結果、思考の繊細さ、合成語の見事さ、詩的表現力、めりはりにおいてそれ（＝ウルドゥー語）はバーシャーを凌ぐようになり、数多くの新しい単語や合成語がこの言葉（＝ウルドゥー語）の幅を広げたのである。」（p. 57）

ペルシア語・ペルシア文芸の影響によって、ウルドゥー語は大いに発展したが、ウルドゥー語の表現力は逆に衰えてしまったとアーザードは慨嘆する。

「彼ら（＝父祖たち）は、芳香を放ち、色鮮やかに咲いていた一輪の自然の花を徒に投げ捨ててしまった。この『花』とは一体何であろうか。それは感銘を与える力である。事実の表現である。繊細な思考力と洗練された眼識を持つ者たちは、隠喩、直喩の多彩さや関連語の的確な使用に熱中し、次から次へと綺想を生み出すようになり、事実を表現することには無頓着になってしまった。」（pp. 57－58）

この結果、ウルドゥー語では天下国家のことや歴史の変化、哲学や倫理について書くことが不可能になってしまった、とアーザードは述べ、その根本原因は「繊細な思考法（nāzuk-khayālī）」にあると指摘する。

「以上のような欠点は、繊細な思考法が生み出したものに他ならない。隠喩、直喩という表現形式や同意文の反復が我々の筆にとりついてしまったのである。我々の先祖は、その色鮮やかさと繊細さに目を奪われて、この非現実的な様式が、我々が本来持っている美点を破壊してしまうことを忘れてしまった—いや、そもそも理解しなかったのである。[11]」(p. 58)

3）特定の詩題の反復

アーザードは、ウルドゥー詩が特定の詩題に束縛されていることに大きな不満を持っていた。

「既に見たように、ウルドゥー語が持つ文芸の財産はすべてペルシア語のおかげで得られたものである。ペルシアの昔の人々は、あらゆる詩題を楽しんでいたが、後代の詩人はガザル詩型だけを用いるようになった。能力ある詩人は、カスィーダも詠み続けた。ウルドゥー詩人も、容易なことだと考えて、そして民衆の嗜好も考慮に入れて、美や恋などを詩題とした。彼らの行ったことが見事なものだったことは間違いないが、このような詩題が何度も何度も用いられたので耳は聞き疲れてしまった。同じ言葉を場所を変えて使ってみたり、形を変えて使ってみたり。同じことが繰り返されている。まるで他人が食べたものを食べているような、否、他人が噛んだものを噛んで喜んでいるようなもの。味などするであろうか。美と恋は確かに素晴らしい。しかし、いつまで繰り返すのであろうか。天女であろうと妖精であろうと飽きてしまったらうんざりするだけではないか。美と恋という詩題にいつまで我慢できるであろうか、もはや百歳の老婆になっているというのに。[12]」(p. 79)

「今、人々は、ウルドゥー詩は恋のことしか詠えない、さまざまなことを表現する力をまったく持っていない、と口をそろえて批判」しており、[13] アーザードによれば、ウルドゥー詩のこのような弱点は、「我々の言葉（hamārī qaumī zabān）の裾についた大きな黒い染み」(p. 80) である。

Ⅲ）ウルドゥー語・ウルドゥー詩の改革—英語的表現法

アーザードの時代は、ペルシア語に代わって英語が支配言語の地位に就いた時代である。アーザードはペルシア語が支配言語であった時代に育った人間であるが、英語の讃美者であった。アーザードによれば、アラビア語やペルシア語が学問の発展についてゆく力を失っているのに対し、「英語は発展と改良の護符」(p. 4) であり、「英語にはあらゆる種

類の単語が存在し、あらゆる種類の思想を表現する方法が存在している」(p. 26) のである。

このように考えるアーザードの目にウルドゥー語はどのように映っていたのであろうか。英語とウルドゥー語とを比較してアーザードはこう述べている。「英語における著述の一般原則とは、何かの様子や心の思いについて書くときには、経験したり、観察したりすることによって心に生じる歓びや悲しみ、怒りや憐れみ、恐怖や情熱が（他の人の）心にもまったく同じように生じるように表現することである」(p. 58)。これに対し、「確かに我々の表現法は、緊密な構成と次々と現れる脚韻の響きによって耳を引きつけ、多彩な言葉や繊細な主題によって心に大きな歓びを生じさせ、誇張や華やかさによって天地を転倒させる。しかし、真の目的、すなわち、心に感銘を与えること、事実を描写することという目的はまったく達成されないのである」(pp. 58－59)。「英語には我々の言語が表現できないような思想や主題が数多く存在している。英語に見られる思想や主題の面白さはウルドゥー語では十分に表現できない。これはこの言語の無力さによるものであり、この言語を話す者にとってはまことに恥ずべきことである。」(p. 60)

以上のような論述から明らかなように、アーザードが目指していたのは、ウルドゥー語・ウルドゥー詩の小手先の改革ではなく、ウルドゥー語・ウルドゥー詩の表現法の抜本的な改革、英語的表現法の導入であった。[14] しかしここで注意しておかなくてはならないのは、アーザードが過去の言語的、文学的遺産をすべて否定したのではないという点である。『生命の水』の「あとがき」の中でアーザードは過去の詩人たちに向かってこう述べている。

「あなたがたの建物の多くは、あなたがたの美と恋の饗宴のために建てられたものである。しかし、それらに用いられた材料で、将来の世代は好きなように建物を建てることができるし、あなたがたの技術から多くの助けを得ることもできる。浮彫や装飾が施され、単なる飾りとして用いられた石を我々は建物から取りはずし、感謝のしるしにそれを目に押し当て、そしてその石を、国家のあらゆる組織を力強く支え、美しさで人々の心を魅了するアーチに飾るであろう。言葉の素晴らしい構成、見事な合成語、隠喩、直喩は恋愛という主題のために用いられたものであるけれども、我々がもし慎重に用いれば、それらは学問、芸術、歴史などさまざまな分野で意味の伝達や表現の大きな助けとなってくれることであろう。」(p. 528)

このようにアーザードは、過去の伝統を無視することなく、それを批判的に継承しつつ、英語を規範として新時代にふさわしい言語、文学を作り上げようとしていたのであった。[15]

註

（1）1883 年には第二版が出版された。初版 1050 部、第二版 2000 部。初版と第二版の異同に関しては、Aslam Farrukhī, *Muḥammad Ḥusain Āzād*, vol. 2, Karachi, 1965, pp. 14－19 を参照。

『生命の水』第二版はPritchettによって英訳されている。

Frances Pritchett, tr., *Āb-e ḥayāt: Shaping the Canon of Urdu Poetry*, New Delhi, 2001.

『生命の水』が後世のウルドゥー文学史研究に及ぼした絶大な影響に関しては、下記論文を参照。

Shamsur Rahman Faruqi, "Constructing a Literary History, a Canon, and a Theory of Poetry." (Frances Pritchett, tr., *Āb-e ḥayāt: Shaping the Canon of Urdu Poetry*, New Delhi, 2001所収)

尚、本稿では、『生命の水』のテキストとしてUttar Pradesh Urdu Academy（Lucknow）版（1982年）を用いる。これは1907年版をフォト・オフセットによって印刷・発行したもので、Pritchettの英訳もこれに基づいている。

（2）目次（p. 5）では、「ブラジ・バーシャーにペルシア語が流入し、いかなる影響を与えたか、また、将来にどういう希望があるか」となっているが、当該箇所（p. 25）では「ブラジ・バーシャーにアラビア語とペルシア語はどのような影響を与えたか」という章題になっている。

1883年に出版された『生命の水』第2版に基づくTabassum Kāshmīri, ed., *Āb-e Ḥayāt*, 1990, Lahoreでも、当該箇所の章題は「ブラジ・バーシャーにアラビア語とペルシア語はどのような影響を与えたか」となっている。

（3）序論の基本的な部分は、1860年代から1870年代にかけてアーザードが行った講演に基づいていると思われる。『アーザード著作集』（Āghā Muḥammad Bāqir, ed., *Maqālāt-e Maulānā Muḥammad Ḥusain Āzād*, 3 vols., Lahore, 1966, 1978, 1987）第1巻及び第3巻を参照。

（4）ブラジ・バーシャーは、厳密にはブラジ地方で話される西部ヒンディー語の一方言であり、中世においては文学語として北インドにおいて広く用いられた言語であるが、次のように『生命の水』では、「バーシャー」あるいは「ヒンディー語」と同様に北インドの言語という意味でも用いられている。

「ヒンドゥー詩人の二行詩（dōhrā）はブラジ・バーシャーで書かれているが、時代時代の言葉の姿を伝えてくれる。スィカンダル・ローディー（在位1489－1517）時代の、ベナレス出身のカビールという詩人は、無学であったが、グル・ラーマナンドの弟子となり、カビール教団の祖となった。著作をまとめれば数巻になるであろう。彼の二行詩に現れるペルシア語、アラビア語の単語には次のようなものがある。」(p. 16)

「17世紀の、バーンダー県出身のバラモン、バーバー・トゥルスィーダースは、学僧でもあり、詩人でもあり、托鉢者でもあった。彼はラーマーヤナをバーシャーに訳し、この比類なき書物は貴賤を問わず好評を博した。彼の二行詩には多くの、そして上記の書物の所々には、ペルシア語やアラビア語の単語が用いられている。」(p. 18)

「当時、ムスリムの言語はどのような状況にあったのであろうか。イスラームが到来して数百年の歳月が流れていた。彼らの先祖は何世代にもわたってここで生まれ、ここで死んでいった。相互交流のために彼らはここの言葉、すなわち、ブラジ・バーシャーを話さなければならなかったであろう。新しく来た者は、自分の言葉とここの言葉とを半分ずつ混ぜ合わせて話していたことであろう。こういった言葉で書かれた散文の著作は見当たらないが、アミール・ホスローの先述のガザルやなぞなぞ、ムカルニーとギートは、ヒジュラ暦700年には、インドのムスリムがバーシャーを十分に使いこなしていたことを示している。」(p. 19)

「ペルシア語がヒンディー語を支配し続けたと考えてはならない。ペルシア語もまたこの地（＝インド）の単語を導入する他なかったのである。元々ペルシア語とサンスクリットに共通の単語は別として、チャガタイ（＝ムガル）王朝の役所では、数百ものヒンディー語の単語がペルシア語の文章の中で自由に用いられていたのである。」(p. 48)

「創造と創作の高度な能力をその進取の気象の中に具えていたアミール・ホスローは、詩の世界にブラジ・バーシャーの導入によって文芸の魔法の館を作り出した。数冊の分厚い冊子から成る『ハーリク・バーリー（Khāliq bārī）』—その簡略版を今日でも子供たちは暗唱している—は、ペルシアの韻律が初めて影響を与えた著作である。この書物によって、当時、どのような言葉が使わ

れており、今は使われなくなっているか、ということも分かる。さらに彼は非常に面白味のある数多くのなぞなぞを作っている。それらのなぞなぞによって、ペルシア語という塩がヒンディー語の味の中に如何なる風味を生み出したかが分かるのである。」(p. 67)

この点については、Frances Pritchett, tr., *Āb-e ḥayāt: Shaping the Canon of Urdu Poetry*, New Delhi, 2001. pp. 7－8を参照。

(5) ウルドゥー語のシャージャハーナーバード(デリー)誕生説は、特に目新しい説ではなかった。たとえば、1803年に出版されたミール・アンマン(Mīr Amman)の『園と春(Bāgh-o-bahār)』にもシャージャハーナーバード(デリー)誕生説が見られる(蒲生礼一訳、麻田豊補、『四人の托鉢僧の物語』、平凡社、1990年、7－8頁)。アフマド・ハーンもその著『アーサールッサナーディード(Āthār al-Ṣanādīd 貴顕の業績の意)』の第2版(1854年)の中で、次のように述べている。

「シャージャハーン帝がヒジュラ暦1058年、西暦1648年にシャージャハーナーバードを建設し、国の各地域の人々が集まると、ペルシア語(Fārsī zabān)とヒンディー語(Hindī bhāshā)がよく混ざり合うようになり、よく用いられたために若干のペルシア語の単語と大部分のバーシャーの単語に変化が生じた。この二つの言語の混合(tarkīb)によって新しい言語が誕生したが、王の軍隊(lashkar-e bādshāhī)や高貴なる軍営(urdū-e mu'allā)で誕生したのでその言語はウルドゥー(の言語 zabān-e urdū)と呼ばれた。よく使われているうちに『言語(zabān)』という言葉がとれ、この言語を(単に)ウルドゥーと呼ぶようになった。」(Sayyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Delhi, 1965. p. 361. この本のテキストは、1854年に出版された『アーサールッサナーディード』第2版のテキストに基づいている。)

ブラジ・バーシャーがウルドゥー語の土台になったとどうしてアーザードが主張したのか詳細は不明である。

ショウカット・サブズワーリーによれば、ウルドゥー語ブラジ・バーシャー起源説を最初に唱えたのはHoernle(Hörnle)である。

「ウルドゥー語はブラジ(・バーシャー)に由来するという説を最初に唱えたのはDr. Hoernleであり、この説を広めたのはムハンマド・フサイン・アーザードである。故シーラーニー(Shīrānī)の名著『パンジャーブにおけるウルドゥー語(Panjāb mēṅ Urdū)』が出版されるまで、この説は正しいものと一般には考えられていた。ウルドゥー語に関心を持つ者は皆この説を信じていた。シーラーニーの著書は1928年に出版され、その中で詳細かつきわめて実証的にこの説は否定された。しかしアーザードの筆の魔術、叙述の魔力のせいで、人々は、ウルドゥー語はブラジ(・バーシャー)の娘である、ウルドゥー語はブラジ(・バーシャー)の胎内から誕生した、と言い続けた。(中略)しかし、ウルドゥー語とブラジ(・バーシャー)両言語の特質を知っている者は、シーラーニーの著書が出版される前から、ウルドゥー語はブラジ(・バーシャー)の娘であるという主張を認めていなかった。」(Shaukat Sabzwārī, *Dāstān-e Zabān-e Urdū*, Karachi, 1960. pp. 53－54)

アーザードは『生命の水』の中でHoernleの名を挙げていないので、彼がHoernleの説を知っていたかどうかは不明である。(尚、Hoernleのウルドゥー語ブラジ・バーシャー起源説の影響がどのようにアーザードに及んだのか、ショウカット・サブズワーリーは何も述べていない。)

アーザード研究者ファッルヒーは、「ブラジ・バーシャーはウルドゥー語の源泉ではないし、ブラジ・バーシャーに基づいてウルドゥー語が形成されたのでもない。アーザードの見解にはマックス・ミュラーの影響があると思われる。誤りはここから生じたのである。マックス・ミュラーは、ウルドゥー語の源泉はブラジ・バーシャーであるとしたからである」(Aslam Farrukhī, *Muḥammad Ḥusain Āzād*, vol. 2, Karachi, 1965, p. 68)と述べ、マックス・ミュラーの著書The Science of Languageから次の文章を引用しているが、The Science of Languageが出版されたのは1891年で

あり、マックス・ミュラーは1880年に出版されたHoernleの著書A Comparative Grammar of the Gaudian Languagesを参照して次の文章を書いているので、The Science of Languageが1880年に出版された『生命の水』に影響を及ぼしたとは考えられない。（尚、アーザードは『生命の水』の中でマックス・ミュラーに言及していない。）

"What used to be called Hindî, the literary or High Hindî,[1] is really a modified form of the Braj Bhâshâ, which was first changed into Urdu by being deprived of its wealth of grammatical forms, and mixed with Panjâbî and Marwârî forms."（Max Müller, *The Science of Language founded on lectures delivered at the Royal Institution in 1861 and 1863*, vol. 1, New York, 1891. p. 181）

引用文1行目のthe literary or High Hindîに付けられた1の注には「See Hörnle, *Comparative Grammar*, p. vi.」と記されていて、Comparative Grammarの当該ページには次のように書かれている。

"The eastern group of dialects constitutes, what I have called, the Eastern Hindí language; the western group the Western Hindí. The latter language is that which most nearly resembles what is commonly known as Hindí, namely the literary or High-Hindí. This latter is merely a modified form of the Braj dialect, which was first transmuted into the Urdú by curtailing the amplitude of its inflexional forms and admitting a few of those peculiar to Panjábi and Marwárí; afterwards Urdú was changed into High-Hindí."（A. F. R. Hoernle, *A Comparative Grammar of the Gaudian Languages*, London, 1880. p. vi）

『生命の水』の英訳協力者シャムスッラフマーン・ファールーキーは、ウルドゥー語ブラジ・バーシャー起源説はバーキル・アーガー（Bāqir Āgāh）やサファー・バダーユーニー（Ṣafā Badāyūnī）によって既に唱えられており、アーザードの時代にはインドの知識人の間に広まっていた説であると述べている（Shamsur Rahman Faruqi, "Constructing a Literary History, a Canon, and a Theory of Poetry." In *Āb-e ḥayāt: Shaping the Canon of Urdu Poetry*, translated by Frances Pritchett, New Delhi, 2001. p. 41）。

19世紀後半におけるインド内外のウルドゥー語認識についてさらに検討し、ウルドゥー語ブラジ・バーシャー起源説がどこから出てきたのかを確定する必要があると思われるが、この説は、サクセーナが1927年に著した、英語による最初の本格的なウルドゥー文学史研究書の中では次のようにアーザードの説として批判されており、アーザードがこの説を広める上で大きな役割を果たしたことは確かである。

"It is also slightly incorrect to say that Urdu is derived directly from *Brij Bhasha*, another dialect of Western Hindi as is maintained by Muhammad Husain Azad, for *Brij Bhasha* though closely akin to and having many similarities with the dialect spoken in the neighbourhood of Delhi, is another dialect spoken in Muttra and surrounding districts. It is its sister dialect that is responsible for the birth of Urdu."（Ram Babu Saksena, *A History of Urdu Literature*, Allahabad, 1927. p. 1）

（6）ペルシア語を真似てウルドゥー語でも詩が作られるようになるのは、ムハンマド・シャーよりも前の時代であり、ウルドゥー語の詩が大きな発展を見せるのは、デカン地方のムスリム王朝においてである。次の文章から明らかなように、アーザードはこのことを知っていたが、『生命の水』本論ではデカンの詩は無視されている。

「誰もが認めているように、今日見られるような詩はデカン地方において姿を現した。（中略）いずれにせよ、アーラムギール（'Ālamgīr ムガル皇帝アウラングゼーブ Aurangzēb のこと。在位 1658－1707）の時代にワリーはこの詩のランプに明かりを灯し、それはムハンマド・シャーの時代に星となって天空に輝いた。シャー・アーラム（Shāh 'Ālam 在位 1759－1806）の時代にそれは太陽（āftāb）となり、絶頂に達した。」(p. 75)（「太陽」＝「アーフターブ」はシャー・アーラムの雅号。）

（7）アーザードの父 Muḥammad Bāqir が発刊した新聞 Urdū Akhbār は、北インドにおける最初のウルドゥー語新聞であった。インド初の一般向けウルドゥー語新聞は、1822 年にカルカッタで発刊された Jām-e Jahāṅ-numā であると言われている。

（8）アーザードのウルドゥー語論の重要な論点の一つは、ウルドゥー語＝インド共通語論である。アーザードによれば、インドの共通語となる資格を具えているのはウルドゥー語である。

「ウルドゥー語の幸運と人気は羨望に値する。ウルドゥー語の基礎はブラジ・バーシャーであるが、それは青春の盛りにおいてすら特定地域の取引の言葉であるに過ぎなかった。ウルドゥー語はデリーで生まれた言語であり、その灯火はデリーの王朝とともに消え去るところであったが、もしインドの真中に立ってこの国の言語は何か、と問いかければ、こう答えが返って来よう―ウルドゥー語である、と。」(p. 61)

（9）既に見たようにアーザードは、ウルドゥー語はブラジ・バーシャーにペルシア語をはじめ、さまざまな言語が混入してできあがった言語であるという認識を持っていたが、ペルシア語の影響が最も大きいと考えていた。何故なら、中世においては「ウルドゥー語の文学、ウルドゥー語の発展と拡張は恋愛詩ガザルや頌詩カスィーダを作る詩人たちの言葉に支えられていた」(p. 23) からである。すなわち、ペルシア詩やペルシア語を規範として詩作していたウルドゥー詩人たちのウルドゥー詩を通じてペルシア語の影響がウルドゥー語全体に及んでいったとアーザードは考えていたのである。

(10)『生命の水』本論の、詩人インシャー（Inshā）を論じた部分で、アーザードは非インド的な比喩の使用を次のように批判している。

「ヒンディー語やインドに特有な主題で詩人ソウダー（Saudā）は見事に詩を作ったが、インシャーもまた、跳躍しながら歩を前に進めた。これは興味深いことである。自分の国にいるのにアラビアからナジュド、イランからベーストゥーン山やシーリーンの城、トゥーラーンからアムー・ダリア河、シル・ダリア河をインドに運んでくる必要があるだろうか。そのようなことをすれば伝達に困難が生じるだけである。」(p. 267)

(11)『生命の水』本論においてアーザードは、詩人ミール・ソーズ（Mīr Sōz）について論じながら、次のように比喩や綺想を弄ぶことを批判している。

「ソーズは平易な主題で詩作したが、形式も平易であった。大抵の場合、反復語句（radīf）を用いず、脚韻（qāfiyah）だけで満足していた。ソーズの詩は慣用表現の面白味のみに依拠している。ペルシア語の連語法、直喩、隠喩、ペルシア語系の単語を用いた合成語はソーズの詩にはほとんど見られない。このような点からソーズをウルドゥー・ガザルのサアディー（Sa 'dī）と呼ぶべきである。もしこのような形で言語（＝ウルドゥー語）が存続していたなら、ペルシア語の絢爛たる詩想が入って来ていなかったなら、表現する力がもっと残っていたなら、今日、我々はこれほどの困難に直面することはなかったであろう。今、二つの難しい作業を行わなければならない。まず、華麗な隠喩や誇張された詩想がまるで口癖であるかのように言葉にとりついてしまっているが、こういったものは除去しなければならない。次いで新しい様式や平易な詩想を取り入れな

ければならない。長い間、このような詩を作り、このような詩を耳にしてきたので詩人の口や聞き手の耳はこのような様式に慣れてしまっており、平易に言葉を味わい深く用いることができず、聞き手に感銘を与えることができないでいるのである。」(pp. 187－188)

(12) アーザード自身が認めているように、ウルドゥー詩の主題は美と恋だけではなかった。

「悲しむべきことに我々の詩は、いくつかのありふれた詩題の網に捕われてしまっている。すなわち、恋、酒と酩酊、薔薇や薔薇園なしに想像によって色彩と芳香を生み出すこと、恋人に会えない辛さを嘆くこと、逢瀬を想像して喜ぶこと、厭世観、天の仕打ち。」(p. 77)

しかしアーザードは、ウルドゥー詩の主題は美と恋だけである、あるいは、恋だけであると言って伝統的なウルドゥー詩を批判するのである。

(13) たとえば、パンジャーブ協会の会員として活動していたブラフモ・サマージの活動家で、パンジャーブにおける「ヒンディー語」普及運動の指導者であったBābū Navīn Chandra Rāēは、「ウルドゥー語では恋愛という主題しか扱われていない」とウルドゥー語を批判している。(Garcin de Tassy, *Khuṭbāt-e Garcin de Tassy*, vol. 2, Karachi, second edition, 1974. p. 97.　この書物ではBābū Navīn Chandと誤って表記されている。)

(14) アーザードは、英語的表現法だけを称賛していたわけではない。彼は、ペルシア語的表現法に大きく影響される以前のブラジ・バーシャーの表現法や初期ウルドゥー詩の表現法をも次のように高く評価している。

「ペルシア語とウルドゥー語の文芸には難解さがあり、ヒンディー 語の文芸には平易さがある。このことについて注目すべき重要な点は、バーシャーが表現対象の状態を、見たり、聞いたり、嗅いだり、味わったり、触れたりして得られる特徴で我々に理解させようとする点である。その表現には誇張の力や熱情のほとばしりはないが、聞いている者は、その表現対象を見て得られる感動を聞くことによって味わうことができるのである。」(p. 50)

「第2期の詩人たちが立ち去る。素晴らしい。老齢であるのに若々しい心を持ち、老練であるのに素朴な心を持っている。『何と優れた人たちであったことか。神よ、彼らを赦したまえ。(Kyā khūb ādmī thē khudā maghfirat karē ゾウクの詩の引用)』複雑な隠喩を用いず、過剰に多彩な直喩を用いることもない。彼らは自分の思いを何と明確な言葉や明解な慣用表現によって表現したことか。今日でも聞く者は陶然となる。彼らの作品は、単なる言葉ではなく、陶酔であった。詩人たちが詩に盛り込んだ思念は、彼らの心と魂を覆った。このために、どの詩句も感銘を与える力に満ち溢れている。万物の真の姿が示されるべきであると主張する今日の西欧の人たちは、まさにこのようなものを探し求めているのである。」(p. 122)（第2期の詩人としてアーザードが『生命の水』の中で取り上げているのは、ハーティムḤātim、アールズーĀrzū、フガーンFughāṅである。）

(15) アーザードは、ウルドゥー詩がイギリス人統治者に評価されていないことに大きな危機感を抱いていたようである。

「最後に理性の占星術師に質問が行われた。衰運にあるこの（ウルドゥー）詩の星はいつか頂点を極めることがあるのであろうか。否。理由を問うとこのような答えが得られた。これ（＝ウルドゥー語）は支配者たちの言葉でもなく、彼らの役に立っているわけでもない。だから彼らは評価していないし、知ってもいない。知っていることが自慢になるとも思っていない。詩人たちは嘘つきのおべっか使いと呼ばれている。ああ、運命よ。我々の言語（＝ウルドゥー語）の基準とされていた詩を書いていた詩人たちがこのような扱いを受けるとは。」(p. 78)

このような状況を打開するために、アーザードは次のような提案を行っている。

「運命を好転させ、我々の詩の庭に再び花が咲き乱れているのを目にすることができるような方策はないのか。ある。神は勇気と創意工夫に大変素晴らしい力をお授けになった。アジアでは、偉大な業績というものは支配者の関心によって生み出されるのである。詩人は支配者の役に立ち、支配者の気に入るようなものを作らなければならない。そうすれば詩人たちは何がしかの利益を得るであろう。利益を得れば得るほど世間の注目を集めるであろう。知恵が絞られ、興味深い発明や素晴らしい革新が行われるであろう。まさにこれこそが進歩と呼ばれるものなのである。」(pp. 78－79)

支配者イギリス人たちの役に立つ詩、彼らの気に入る詩とは如何なるものか、アーザードは具体的に論じてはいないが、1874年に催された、いわゆる「パンジャーブ協会の詩会」において発表されたような詩を頭に思い描いていたのであろうと思われる。(「パンジャーブ協会の詩会」とは、パンジャーブ州公教育局の指導のもとに、1874年5月から1875年3月までほぼ月1回開催された詩会で、ガザルを発表し合う伝統的な詩会ではなく、あらかじめ与えられた詩題に基づいて詩を作り、発表し合う詩会であった。詩会の主題は、「雨季」、「冬」、「希望」、「郷土愛」、「平和」、「正義」、「美徳」、「満足」、「文明」で、この詩会においてアーザードは指導的な役割を果たした。)

(2005. 12. 8受理)